

美術の窓(78)

「寢覚物語絵巻」の装飾性

大和文華館顧問 関口正之

当館蔵の国宝「寢覚物語絵巻」の冒頭には桜の花の下で合奏する三人の童子の姿が描かれる。この絵に対する詞書はない。満開の桜は、彩色する前に施こされた金銀の箔や砂子の輝きに映えて春たけなわの絢爛たる趣きが鮮やかである。この趣きは本絵巻を特徴づける。本絵巻については、美しい料紙に描き豊かな装飾性を示す点に特色があること、その特色によれば製作年代は平安時代後期（院政期）であることが一般に認められている。

そこで、料紙の装飾に着目して本絵巻を見直すと、単に同種の料紙装飾を用意して描いたものではなく、明確な方針に従って装飾を加えたのではないかと感じられる。それは、屋外の空間を表現する部分にのみ特に金銀の箔と砂子を施

こしたと思われる点にある。屋外空間は、四段ある絵のうち三段に表わされ、箔などの置き方には精粗の差があり、童子合奏の絵第一段が最も密度が高いが、何れも彩色の下に金銀を置いている。

室内を描く彩色の下から切箔の四角い形が見えるので、本絵巻の絵の段はいわゆる装飾の料紙を用意してその上から描いたと解釈している解説もなされているが、室内を表現する部分に見出される箔や砂子の位置は屋外部分に接した場所であるので、屋外部分を想定して箔等を置いたとき、室内を描く部分にはみ出したものと考えられる。すなわち、本絵巻製作の発案者は、絵の構図を推敲し屋外空間が描かれる部分にのみ箔や砂子を置くことを指示して料紙を作らせたと考えられないであろうか。

この仮定に立てば、庭に近い室内に箔などがはみ出している理由と、室内のみを描く絵第四段には箔などの痕跡が見えないこととの説明が可能となる。恐らく発願者達は作品が仕上がったときのイメージを実現させるための周到な準備として、料紙の特定の部分に箔や砂子を置いたと推測される。美しい料紙が到着してから写経をしたと思われる装飾経の例とは異なり、本絵巻の場合は料紙装飾そのものが絵巻製作の作業の第一歩であった。院政期においては絵巻製作の発願者が技法と効果を熟知して自分達の希望を実現させようとした好例であろう。

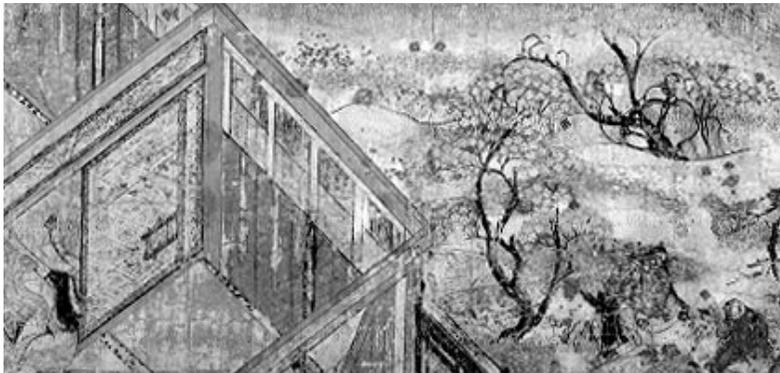
院政期は、仏画製作において公家等の発願者の強い意向が製作活動を変更させた事例が知られていて注目される。その(1)は大治2年(1127)に東寺宝蔵炎上により焼損した五大尊像と十二天像の合計十七幅を新調したとき、鳥羽法皇が出来映えを「粗荒」と評したため描き直しとなったこと、その(2)は東京国立博物館蔵孔雀明王画像(国宝)が原本の画像にある持物(吉祥果)を石榴に変更させられていることである。(1)は鳥羽院の美意識が仏像の表現を左右させるほど明確であったことを、(2)は仏像製作にとっては

最も尊重さるべき図像を、御産御祈のためと推定されているが個人的な理由で、変更させるほど強い姿勢が示されたことを物語る。

寢覚物語絵巻の場合は、絵巻製作が単に料紙の上に絵を描いたのではなく、料紙装飾の技法と効果を絵画表現に活用したことが知られる貴重な例であると考えられる。本絵巻の全容は現存する部分は詞と絵のいずれも全体の僅かな一部と推定されているので、絵第一段において童子達が合奏する空間を、満開の桜のほか金銀の箔と砂子を用いて雪国のダイヤモンドダストにも似たきらめきで満たし、優れた空間表現に仕上げた意図は不明である。

金銀の箔などで装飾した料紙を用いて和歌集を作り或いは写経をした例は少なくないが、絵巻を描いたものは平安・鎌倉時代の作品の中には見当たらないので、屋外の空間に金銀の箔・砂子を置いてきらめかせる技法は、本絵巻独特の表現であると言えるであろう。絵巻研究の分野では最近新しい視点による優れた成果が公表されつ、あるので、いわば本絵巻の謎とも言えるこの表現についても少しずつでも解明されることが大いに期待される。

寢覚物語絵巻 第1図



同 第3図

